

福祉施設間『ネットワーク』を生かした商品作り

社会福祉法人 旭川健育会 障害者支援施設 旭川美景園 園長 林 春 夫



北海道第2の中核市である旭川市全域を見下ろすことができる高台に位置する旭川美景園は、開設以来30年にわたって、身体に障害のある方々に生活の場と就労の機会を提供してきた入所型の福祉施設である。



施設利用者が行っている作業の中心は、木工玩具製作である。開設当初は、木工作業の他に貝を使ったアクセサリーの製作や花卉栽培も行われていたが、現在は完全に木工作業に特化している。

旭川美景園を利用される方々は、脳血管障害により半身にマヒが残ったり、不慮の事故等から車椅子での生活が必要になるなどの重い障害があるため、就労の意思を持っていても、自身の残存機能や体力を考えなければ生産活動に従事することは難しい環境にある。

そのような状況を考えると、当園で行っている木工作業の工程は、磨き・塗装・組み立て・包装等、作業の細分化ができ、利用者それぞれの身体機能や体力に応じた作業を提供できることになる。

■日本一設備のない施設が、どのようにして木工製品や製造情報を全国に発信することができたのか？

旭川美景園の木工作業が長期間にわたって、木工製品や製造情報を全国に発信できたのには理由がある。通常、木工品製造の現場では、数十種類の専用機械が存在し、機械力を生かした生産体制が取られている。しかし、当園に置かれているのは、糸鋸盤2台とボール盤、それに丸鋸盤2台のみである。見学に来られる

方々から「これだけの機械力で、何故、数多くの木工製品が提供できるのか？」とよく聞かれる。そういう場合、「当園には、オリジナル生産システムがありますから大丈夫なんです。」と答えるようにしている。当園が実践しているオリジナル生産システムの秘密は、生産の『外注化』である。つまり、木工作業のメイン工程であり、加工に各種の機械が必要となる「木材の切断」を外注化し、最終的な組み立てや磨き作業、出来上がった製品の包装など、大型機械や広い場所を必要としない工程だけを当園で行うという製造システムである。



ここ数年、旭山動物園で大人気の『動物パズル』は、他の事業所から材料が切断され、トリマーをかけた状態で納品される。それを美景園の利用者が丁寧に「やすりがけ」を行い製品化している。もちろん、外注といっても、木材の加工を依頼しているのは、木工作業を行っている他の障害者施設（北海道内が中心）である。そもそも、製品のデザインや商品開発は、旭川美景園内で行っているからできるシステムであり、生産の『外注化』というよりも、施設間連携・施設間ネットワークを有効に活用しているということになると思う。

■施設間ネットワーク利用のきっかけは？

以前は、旭川美景園でも他の施設のように100%の比率で施設内加工・製造をしていた。札幌市内のデパートや千歳空港内での販売会では、5日間で100万

円を超える売上があり、生産が間に合わない事態に陥ることもあった。重度の身体障害を持つ方々が従事し、機械力もほとんどない当園では、木工品製造の製作所としての体力不足が露呈してしまう事態となっていた。



ヒット商品を作っても、生産力がないため需要に応えることができない。ここまでは、福祉施設の実産活動ではよくあることと感じる。この場合、一般的には2つの解決策が考えられると思う。ひとつは「生産設備や職員を増やして、需要に応えられる生産体制を整える。」という積極策。もうひとつは、「福祉施設だから、突然の大量注文には対応できない。」とお客様に理解を求める消極策である。

しかし、当園では、これらの解決策のどちらも採用していない。いくら機械を導入しても現場の実産能力を考えると、最終的には従事する利用者や担当職員に負担がかかるだけであり、そのような生産体制を取することは、重度の障害を持ちながら生活する利用者がある福祉施設にはそぐわないのではないかと。唯でさえ、徐々に利用者の高齢化・障害の重度化が進んでいるなかで、職員を増員するにしても、介護職員の採用により利用者への介護体制を充実させなければならない状況にあった。

当時の旭川美景園は、そのような状態であったが「せっかく製品が売れているのに、お客さんをみすみす逃すのはもったいない。」そんな悩みを販売会で知り合った他の施設職員に話すと、他の施設ではうらやましいくらいの機械設備が用意されており、生産力にもまだまだ余裕があることが分かってきた。そこで、これらの設備環境を当園のために活用できれば、製品デザインの開発や仕上げ・包装作業など当園の最も得意とするところを発展させることができるのではないかと。旭川美景園は「製品企画」

と「仕上げ磨き」等の部分的な工程だけで、大量受注に応じられる施設になることが可能になるかもしれない。

以前から、福祉施設はどうして100%内部で物作りをしたがるのだろうか？という疑問を持っていた。トヨタや日産などの大企業では、自社内ですべてを作り上げることはしていない。どこでも部分的な工程を関連会社に委託して、製品と一緒に作り上げている。むしろ、福祉施設のほうが互いに理解し合える部分が多く、日本中にネットワークを築くことができるのではないかと。これを活用することができたら、福祉施設の製品はもっと良くなるはずである。



■「就労支援」と「介護支援」の両立をめざすには？

旭川美景園がこのような発想の転換をすることができたのも、当園の置かれている環境によるところが大きい。作業支援を通して工賃アップをめざすことが最優先ではなく、施設を利用される方々の生活環境（各種支援・介護）の充実を図る必要があったからである。

当園で商品となった木工品を購入していただいているお客様には、製造元が福祉施設であるという事情は

関係がないと思う。ただ、市場では質の高い商品と適正な価格が求められるのであり、それらの需要に対応できなければ、経済活動の継続は困難になってしまう。

旭川美景園では、木工作業に従事している利用者の作業負担を増やすことはできない。かといって、毎月の僅かな作業工賃を減らすことはしたくない。更にお客様から注文される仕事は断りたくない。このような状況から生まれた生産システムは、他の福祉施設への外注に頼ってはいるが、商品自体は当園のオリジナルであり、最終仕上げは旭川美景園が責任を持って対応している。今までは無かった他の福祉施設との連携で、小さな施設でも大きな生産体制が確保できることを証明できたのである。



*積木トラック本体は、ほぼ完成品の状態で納品され、ここから積木の磨き・本体の磨き・組み立てがおこなわれる。

■共同受注・共同生産が今後もカギとなる？

現在、旭川美景園では、木工作業を行っている北海道内の4施設（旭川春光会・新得わかふじ寮・稚内木馬館・平取町すずらん福祉園）、道外の施設では、川本園（埼玉県）・守山作業所（愛知県）・れもん会社（滋賀県）とネットワークを組み、木工品の開発や共同製作を行っている。

今後も、木工作業を利用者の就労支援として取り組んでいる施設間の連携を強化し、販売会や研修会等の開催を利用してネットワーク構築を推進していくことが必要だと考えている。

毎日、重度の障害を持ちながらも熱心に木工作業に取り組んでおり、一般市場で評価される製品作りに参加していることを誇りに感じている旭川美景園の利用者の皆さんの期待に応えるためにも、この生産システムを発展させていかなければならないと思う。



*風がとても心地よい「木製うちわ」・・・
全国大会の記念品として2,500枚製作（業者・3施設合同製作商品）、短い製作期間にもかかわらず、共同制作により無事に納品（ヒノキ材使用）



*守山作業所（愛知県）・旭川春光会、わかふじ寮、すずらん、旭川美景園（北海道）にて共同制作
日本セルフセンターを經由しNHKへ20,000個納品（製作期間40日）（シナ材使用）

商品紹介です



*ゆら〜り・ゆらりと三角形の台に板を組み、その上に木製のマスコットを乗せていく。リス、ヘビ、ぶ

た、ぞう、きりん……。 「いつ崩れるか。」とハラハラするが、台の上で揺れるマスコットは愛らしく、笑みがこぼれる。木の持ち味である「ぬくもり・手触り感」を重視。木材の天然の色彩を最大限に生かした商品。(マツ・キハダ・クルミ・セン材使用)



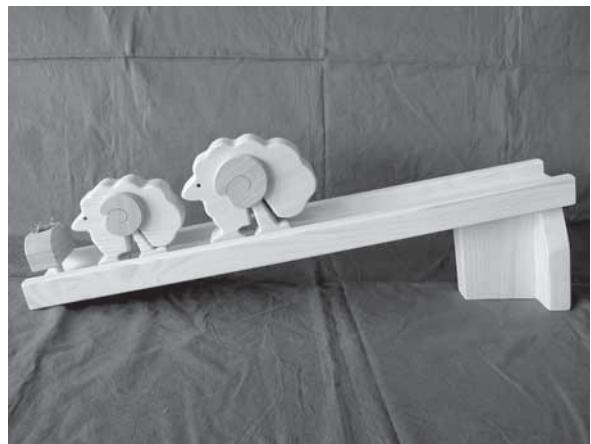
*大会トロフィー (どんな大会でも作成可能)
(セン・ニレ材使用)



*美景園製品の一番人気商品
16ピース・12ピース・9ピース・6ピースあり
三種類の木を重ねて切り、天然色にこだわった一品
(現在までに20,000枚作成)(シナ・クルミ・キハダ材使用)



*本体が手動で回転する愛くるしい商品
木材の持つ質感を感じられる一品(セン・ニレ・クルミ材使用)



*カタカタ・カタカタ・親子ひつじが音をたてながら滑り台をゆっくり下りていく。ふと笑みがこぼれてしまう一品。(マツ・スプルス・クルミ材使用)

■終わりに

旭川美景園は、施設を利用されている方や入所施設での生活を希望される方々に「安心・安全」と「安らぎのある生活」を提供し、生産活動を含めた各種活動を通して社会参加を支援する施設である。

昨今のように、福祉法制が目まぐるしく変化する環境においても、利用者の皆さんの個々の求めに応じた支援を提供し、地域から選ばれる施設をめざしていくためには、就労支援(木工作業)分野の更なる「ネットワーク化」を構築していくことが必要と感じる。

今後も、旭川美景園を利用される方々のニーズを最優先に考えながら、施設運営に取り組んでいきたい。